

宮代隆夫君の2023年「大調和展」の出品作

(「第61回大調和展(東京都美術館:2023年4月26日~5月2日)」で展観)

作品1・タイトル:ベネチアのゴンドラ工房 50号(1.2^横×0.9^縦)



(別に専門家でもない伊藤の独断的な感想)

空に漂^{ただよ}う雲の表現、水路に立つ^{さざなみ}漣の表現、その波に映る建物の影などに苦心されています。ただし、画面右下の水面と映る影が、この写真では不自然になり、波なのか、地面なのか、漂う藻なのかわからない感じで、引っかかります。(写真だから額のガラス面の映り込みか?)

各建物ごとの違いにも留意されて画かれています。全体に、建物がどっしりしないで、軽く、歪^{ゆが}んでいるような感じもします。画面中央のゴンドラをつなぐ8本の杭の内、手前の4本が陸側に傾いているから、その印象を受けるのでしょうか(実際に傾いているのだと思いますが、絵の構図の中では真っ直ぐにした方がいいのではと思います)。左に遠景として描かれている塔(サンマルコ広場の塔か)も右に傾いております。

宮代君の色遣いの特色とも考えますか、彩度を落としている中での明るく、穏やかで優しい感じも抱きます。色の評に「穏やか」「優しい」は適切では無いとも思いますが、大事な個性だと感じます。



（伊藤の独断的な感想）

富士山と、そこに残る残雪の表現は非常に^{たくみ}巧です、富士山の山肌をブルー系統の色で塗ったのも独創的で好きです。

空の青の濃淡も面白いです。右の上空が濃い青一色は、ちょっと重たすぎる感じを受けます。左の空の掃きかける4段の雲も苦心されていると思いますが、単調な気もします。

「宮代カラー」と評したくなる明るい、爽やかで優しく、穏やかに色は「ベネチアのゴンドラ工房」と同じような印象を持ちます。

ここでも、富士山裾の手前の木々が不自然に^{すそ}右に傾いて描いております。彼の癖なのか、彼にはそのように見えるのか。

この箇所^{すそ}に白いモヤみたいのが見えますが、これは額のガラスの映り込みでしょうか。

茶畑は手前の3畝が右肩上がりなのは、右に傾いている木々を意識したのでしょうか。茶畑の畝は、実際はもっと整っているはずですが、少し段差ができています。右よりの傾いている木々の下部の畑は茶畑とは違う栽培物でしょうか。